

7月4日、ビッグス粒子が99・99999%の確率で見つかったと発表があった。新聞、TVでおおにぎわいだからここでは触れる必要もないとおもうので、記録としてみじかく書き残しておく。

あとは、全宇宙の96%を占めていながらもいまだに観測されていない暗黒物質と暗黒エネルギーの正体がわかれば宇宙の仕組みがわかるのだが、生きているうちにそういう幸運にであえるだろうか。

大飯原発が再開した。政府はいろいろ詭弁を弄して夏の電力不足をいいたてているようだが、ぼくはTVや新聞を熱心にみていないので彼らの主張を正確にしろないからどうのこうのはいえないが、先日、たまたまNHKのニュースを見ていたら、政府が原発再開について市民から意見を「伺う」ということをやっているらしく、その意見をいう人のなかに電力会社の人がいるとかで、原発反対の人たちはいろいろ騒いでいたが、反対であれ賛成であれ、だれがなにをいってもいいという立場のほくにしてみたら、ちょっと違和感を感じた。会社側のヤラセで来ていたっていいじゃないか。「原発反対だけは唯一無二に正しい」と意見が集約されることのほうがこわい。反対意見を排除して自分たちだけの意見を聞けという集会のほうがこわい。

それに、そこに参加した電力会社の人が、福島では原発の事故があつたが、人はひとりも死ななかつたというような発言をしていた。こんな発言が聞けるなら、原発賛成の人も多数発言させたほうがいいのでは、とそのニュースをみながらおもつた。

経済がそんなにいいのか、すこし考えてみてはどうだろう。

トヨタやソニーや旧財閥系の銀行や商社などに就職しなくても生きていく手段は山とある。世界を股にかけた仕事をした人は、まあ、「そういう人はいかん」ともいえないので、そういう人はほそぼそと世界を股にかけるといい。

少々貧しくなつても生きていく方策は知恵を出せばいろいろ出てくるだろう。前にも書いたが、原発が日本の電力の30%を支えているとしたら（その当時は30%だといわれていたが、いまは何%なんだろう）、欲望を30%控えて暮らしてみるのもひとつの手だ。ぼくのような年寄りには30%減の欲望に耐えられるが、いまの若い人たちには無理だ、という人がいるかもしれないが、それはわからない。若い人たちもこんな欲望だらけの社会をなんとかしたいとおもっている人もたくさんいるとおもう。たつた30%なのか、30%もなのか、人によって受け取り方は違うだろうが、とりあえずは、少々貧しくなつてみることははじめてみたらどうだろう。もつとも、金銭的には貧しいが精神的には豊かだ、と自らの生き方を誇りにおもつて生きている人は少々苦手だ。（誇らなくてもいいとおもう）

まあ、この文明はいつか減じるだろう。永遠に繁栄した文明などかつて一度もなかったのだから。それが原発禍なのか、それとも他の要因なのか、どちらにしても文明は文明自身の欲望におしつぶされて減んでしまうだろう。30%減の欲望で暮らしたらこの文明が減びることはない、などというつもりはない。30%減で暮らしてもこの文明は減びるだろう。だったら、30%増の欲望を満喫して死にたいという人が出てくるかもしれない

そんな認識で原発を再開しようとしている電力会社の思惑が透けてみえてきたではないか。

直接的に原発事故では人は死ななかつたかもしれないが、土地を捨て、家を捨て、葉民となつた福島の人たちがどれほど死んだのか。死なないまでも、異国で異業種で生計をたてなければならなくなつた人、生計すらたてられない人、孤独に胸をかきむしられている人。そんなかれらはカウントされないのだろうか。人が直接亡くなることとおなじぐらいおおきな後遺症を抱えて人々は生きているというのに。

こんな貴重な意見が聞けるなら、おおいに電力会社の人に喋らすべきだ。まだまだ「貴重な意見」をたくさんお持ちだろう、きつと。こんな人たちに日本国民は電気を握られている。

大飯原発再開の理由は、この夏の電力不足がおこり、国民生活が危機に陥るかもしれない、ということらしい。その先には原発関係の利権や、経済界の圧力などがあるだろう。経済界は、電気が不足したり、電気料が高くなつたら海外の安価な電気を求めて工場を発展途上国に移すというようなことをいつているらしい。そうなれば、日本での雇用が減り、下請工場がつぶれ日本の経済はなりたたなくなる、とおどしている。

かれらは日本という国はどうでもよく、自分たちさえ儲ければいい、という人たちだろう。経済がそんなに大事か、といつてみたところで、経済音痴を自認しているばくでさえ、この日本の資本主義経済に泳がされながら生きているので、そんなにおおきなことはないが、前からいつているように、ここはひとつ、日本という仕組みを考えなおすいい機会ではないか。

が、その人を積極的に説得できる言葉をほくは持っていないし、まあ、説得しようとおもわれない。

野田某は、電力が不足すれば、病院や人工呼吸器が止まり、人の生命にかかわる、ということもいつているが、なんか、人の命を人質にされたようで野田某の品性を疑ってしまった。停電があつても人の命に関わることは政府がちゃんとバックアップすべきことだ。それが政府の仕事ではないのか。それを、まるで人ごとのように「だから原発を再開する」と。その発言は、目の前のリスクを政府としては処理できないから、長期的なリスクよりも、短期的なリスクを回避するために原発を再開するというギブアップ宣言だ。

まあ、こんなことをここでウダウダと書いてもしかたがないので、ぼくはぼくなりに生きていく。日本という仕組みを変える力は（当然）ないが、日本という仕組みからすこしずつズレながら残りの余生を生きていきたい。（できたら暗黒物質の正体を知ってから死にたい）

話はすこしずれるが、日本は世界で唯一の被爆国だ、ということになっているが、ほんとうにそうだろうか、いつもおもっている。アメリカは日本に原爆を落とす前、ニューメキシコ州で核実験をやっている。その後もマーシャル諸島などで（そのとき日本の漁船が被爆した）核実験を行い、ソ連や中国も実験を繰り返した。その実験場所は人口密集地から遠く離れたいわゆる国内周辺地域や植民地である。そして、そこに住む原住民、少数民族が被爆した。いつも犠牲を強いられるのは原住民、

少数民族である。中国は新疆ウイグル自治区で核実験をおこなう多数の犠牲者が出た。この人々も被爆者としてカウントされるべきだろう。かれらもアメリカ国民であり中国国民であり、ソビエト国民であるならそれらの国も被爆国としてカウントされるべきである。原住民、少数民族だからといってカウントされないのはすこし違うといつもおもっていたし、かれらは自分の国（新疆ウイグル自治区のひとたちは中国を自分の国とはおもっていないだろうが）によって殺されたのだ。

7月30日、嫌なニュースがはいってきた。姉を刺殺したとして裁判にかけられていた広汎性発達障害、アスペルガー症候群の被告が「十分に反省していない」「アスペルガー症候群に对应できる（社会的な）受け皿が用意されていない」という理由で「許される限り長く刑務所に収容し、内省を深めさせることが社会秩序の維持にも資する」と16年の求刑を越える20年の判決が言い渡された。「反省していない」のは反省していても他人にうまく伝えられないからだし、「受け皿がない」ことは被告の責任ではない。社会全体の責任である。

刑務所に4年長く隔離すれば「内省を深めさせる」ことができるといふのだろうか。何年の刑期が適正なのかそんなことはよくにはわからないが、求刑よりも長い刑期を課したことは裁判官や裁判員が被告を危険人物とおもったのだろう。危険な人物は刑務所に入れておけ。そういう発想なのだろう。

松岡政則さんから『口福台湾食堂紀行』（思潮社）という詩集

生活の残りがそこいらにちらかって

まども洗濯ものも耻かしい

ここにはぐまいな因のくらがりがある

分有したいたましい沈黙がある

知る、とは生まれるということだろう

からだのままで触れにくる

ひかりのことをいうのだろう

「満腹食堂」にはだれもいなかった

聲はつけっぱなしのテレビだった

カウンターに洗いものの粥椀や

大皿がかさねられたままになっている

それが、なんかまぶしかった

こんなのがいつか

ひかりになるのだろうかと思った

日本語でもかまうことはない

ごめんください！

ほくは台湾についてはまったく疎い。侯孝賢の映画を見たぐらいだ。そのなかでも『悲情城市』という映画は日本統治から中華民国が台湾を占領したそのあたりのがテーマで、松岡さんのこの一冊にも、台湾原住民や外省人、本省人という単語が出てきて、台湾という民族の複雑さが背景に語られている。松岡さんがなぜ台湾を放浪するようになったのかはわからないが、この一篇が語っているように、松岡さんはひとの旺盛な生命力、雑多な快楽、を台湾にみているようだ。

をいただいた。冒頭の「口福台湾食堂紀行」という詩が絶品なので全篇転載する。

歩くとめし。

それだけでひとのかたちにかえっていく

歩いておりさえすれば

なにかが助かっているような気がする

荒物屋、焼き菓子や、飾り札屋、

ちいさな商店がならんでいる

路につまめたキャベツや泥ネギ

魚屋をのぞけば漫波魚（マンボウ）の切り身

繁体字のにぎわいにもやられる

なにやらこそそしたくなる

あおぞら床屋みたいのがあった

ながい練香をつんだ荷車が停まっていた

ここでみるものはみなからだによい

黒糖饅頭ふたつください！

蒸籠の蓋をとりながら

阿婆がなにか言ったけどわからない

わからない、も愉しい

あいさつがあつてよかった

あいさつとは態度のことだろう。

路が岐かれている

えたいの知れないほうを択んでしまう

この詩は出だしから快調で、「歩くとめし」それだけがひとには大切なことだ、と。歩いておればなにが助かるのだろう。個々の生き方だろうか、健康だろうか、世間との関わり方だろうか、自分との付き合い方だろうか、まあ、そんなものがまるめて「助かっているような気が」してくる。歩き、めしを喰らう。ひとの祖先はそうして日々をしのいできた。その記憶がときどきぼくらを身体の奥から突き動かすことがある。

（荒物屋、焼き菓子や、飾り札屋、ちいさな商店がならんでいる／路につまめたキャベツや泥ネギ／魚屋をのぞけば漫波魚（マンボウ）の切り身／繁体字のにぎわいにもやられる）

ここには無駄さ、雑居さ、煩雑さ、快楽、愉楽、そんな生活の習慣が並んでいる。ひとはものを喰らい、排泄する。それが基本だ。

商店の横には軒先の散髪屋、練香の露天売り、それらは（からだによい）。ひとは昔からこうして生きてきた、と松岡さんはおもっている。いまはみように上品で、清潔で、クリーンな環境が好まれてるが、昔から商店、露店売りがひとの営みを背負ってきた。手作業で、非効率的で、大雑把なものは（からだによい）と松岡さんはいっている。

そんなひとの営みがゆるやかに流れている路地を歩きながら、饅頭を買う。店番の老婆が台湾語で、たぶん「ありがと」とか「どこから来なすつた」ぐらいのことをいったかもしれないが松岡さんにはわからない。この異土の地でなにかもわかっけてしまつてはおもしろくない。（わからない）関係も（愉しい）。挨拶とはそのひとの生き方のあらわれだろう。

松岡さんの詩には、食べもの、土地、ひと、すべてで具体がある。ぼくのように屁理屈で詩を書こうとしていない。「歩くとめし」という身体性で詩をとらえている。そのことが言葉に身体性を与えると同時に、読者の感受性にも身体性を与える。

終連の〈ひかり〉とは生命のことだろう。いや、生命でなくともなんでもいい。読者が思いつくものすべての謂いだろう。

この終連で松岡さんの思いがあらわにされる。

〈日本語でもかまうことはない／ごめんください！〉と松岡さんは、言葉ではなく声をかける。「思い」があれば、声だけで充分通じる。満腹食堂のひとはまだ出会ってはいないが、出会う前のひとでも、ひととして、声さえあれば思いは通じる。松岡さんがこの詩集一冊でいつていることはまさにその一点につきるのではないだろうか。ひととひととの営み、ひとと世間との営み、ぼくたちが近代化、合理化の名のもとに遠くへ捨ててきたものを松岡さんは静かに再発見しようとしている。